龍族

RYUZOKU

第１９号

南天会

令和２年

７月２０日

未来を指し示すアンベードカル博士

仏教は、自己変革、社会変革を期する者に開かれた教えである。ブッダ自身が自らの大きな問題意識の解決を希求され、覚りに至った。そういう仏教の歴史において、不可触民解放というインドの社会を大きく変える大命題に向かって仏教を選択したアンベードカル博士は、真実の仏教の実践者であると言える。ブッダの言葉は教えの実践の推奨に満ちている。ブッダは私たちにこのように生きよと強く指し示す。その教えを実践するのは私たち自身だ。私たちはブッダの教えを指針として立ちは

だかる様々な問題を乗り越え、言わば自らと社会を前進させることができるのである。

アンベードカル博士は、理不尽なカースト差別に抗して、その錯誤を明らかにし、それを除く道を歩んだ。あらゆる非難、批判、打擲、甘言、無視、暴圧を排し、真っすぐに真理を見据え力強く歩み続けた。その支えとなったのはブッダの教えであった。その歩みはブッダの歩みに続いている。インド憲法を書き上げ、仏教への改宗を成し遂げたわずか2ヶ月後、博士はこの世を去った。しかし、その最期の直前まで校正しつづけた大著『ブッダとそのダンマ』がある。アンベードカル博士の歩みは一冊の本となって続いてゆく。英語からヒンディー語、マラーティー語、中国語、そして山際素男氏による日本語訳が出版され、広がりを持って読み継がれている。

佐々井上人は、『ブッダとそのダンマ』光文社新書版のあとがきによせて、この書を批判する世界の仏教者、とくに日本の仏教者に向けて激烈な反駁を行い、その盲を真剣に正そうとされている。いわく「観よ!!インド仏教再興還来の父、インド国憲法起草の父、不可触民解放の父といわれる永遠不滅の人、B・R・アンベードカル大菩薩が必生必死の魂魄心血をもって綴り上げたるこの一書、全頁、全文、一文、一言、一句は、アンベードカル必生の心血と全身霊を傾注、考察に考察を重ね、熟慮に熟慮して一文一文書き進め書き上げたものである。しからば知れ!!この一書、この『ブッダとそのダンマ』の一文一節一句すべて燦然として大光明が放たれているのが観えぬのか！その一句一句に仏菩薩の御姿が宿られているのが観えぬのか！うつけ者!!」「―前進、前進、また前進!!ブッダと共に、アンベードカルと共に」「この『ブッダとそのダンマ』たる一書を除いて、他書によるインド民族の人間解放とこの娑婆世界、この世・人間世界における仏国浄土建設は不可能である」

ブッダは示された。私たちが真に堂々とこの世界に於いて生きていくその道を。アンベードカル博士はインド最底辺の人々の心に即して、その苦しみ、悲しみ、怒り、あきらめの中から立ち上がり、ブッダの教えを実践した。その道が続いている。今まさにその道の最先頭を傷だらけ泥だらけ糞だらけで前のめりに進んでいる佐々井上人。ともに歩むインド仏教徒の人々。わたしたちはどうするだろう？道行く人をあざ笑うか、批判するか、あるいは評価するか、無視するか。立ち上がり一歩前に進んでみよう。佐々井上人の後を追いかけ、人々と肩を並べて歩いて行こう。

アンベードカル博士の銅像の高く掲げられた右手は、インドの未来、インド仏教の未来、世界仏教の未来、全世界の未来を指さしている。

（表紙写真：ナグプールのドクターババサヘブアンベードカル国際空港に聳え立つアンベードカル博士像）

『ブッダとそのダンマ』
The Buddha and His Dhamma
B・R・アンベードカル著
山際素男訳／光文社新書２００４
４３０ｐ／定価（１０００円＋税）
ブッダ、アンベードカル、佐々井秀嶺
その道を一本に貫く指針がこの書である。龍族必携の基本聖典。巻末に山崎元一氏の解説と、佐々井上人の「『ブッダとそのダンマ』再刊によせて」収録。南天会事務局在庫あり。

必生不動尊請来１０周年記念

佐々井秀嶺上人講演会

２０１９年６月９日　岡山　長泉寺

皆さん、私、佐々井秀嶺といいます。今回光研大和上様の思し召しとお招きによって、岡山の長泉寺という非常に歴史の古い、五百年にもなるようなお寺に招待されました。今日の招待の理由は、あの前にあります、十年前インドの硬い硬い石を堀り上げてですね、オリッサから彫刻師を呼んで彫刻した、まあお不動様の御像であります。光研大和上様が私に伝えたのは、インドに仏教を再興するということにおいてインドの若い青年方が、若い人たちが、インドに仏教を再興する中心的な人たちになってもらいたい、そしてその中から選んで、ただ前進して不退、退かない！そういう確固たる信念を持った青年像を不動明王のお姿でこのお寺に置きたいということで、私に頼まれましたので、私は光研大和上様のインド仏教再興への願いというものをインド青年の姿に変えて、またその青年の姿を不動明王の姿に変えて、それを刻んで日本に送りたいということにおいて着手いたしました。

オリッサから、オリッサ州といってご存知でしょうか。カルカッタの南の方です。東インドのね。私のいるところはインドのど真ん中で、ナグプールといいます。ナガ・プールというんですが、インド全国においてナーガの付く、まあ龍ですね、龍の付く都市名はこのナグプールのみであります。

〝龍〟龍の都。というずっと以前からの名前であります。市の中心に「ナーガの川」という川が流れています。もう西紀

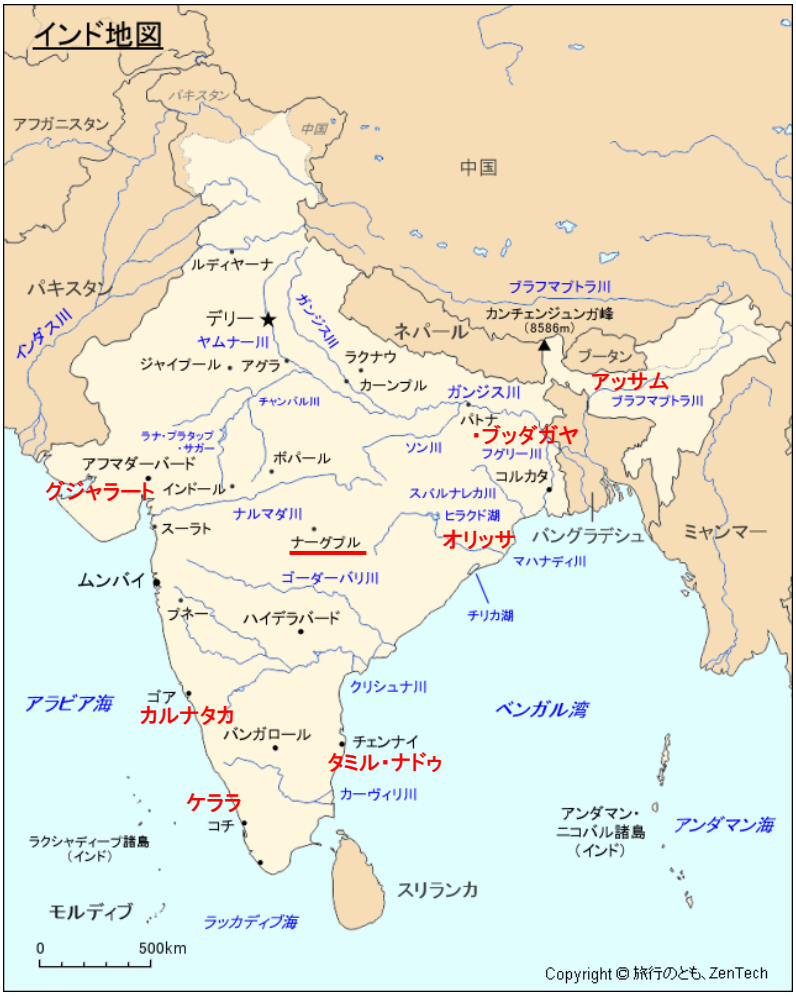
前から、どのぐらい経っているのかわかりません。非常に古い川でありますが、その両岸に大昔より〝龍種族〟という人たちが住んでおりました。そこでこの街をナーガの街、龍の街、まあ言わば龍宮城ですね。その街に私は行ったのであります。住んでおります。オリッサの東天竺から真ん中の天竺に彫刻師をお呼びしたのであります。

私は忙しくて一日中監督することも出来なければ細かいところに注意を与えることも出来ませんでした。ただ御前様の御言葉を受けて、彫刻師に「インドの青年の雄々しい姿を刻め。これからのインドを背負って立つ、そうした顔を持ったそういう青年を刻んでほしい。これは日本からの注文なのだ。」と言って、任せました。オリッサの技師は三、四人来て、毎日仕事をしておりました。

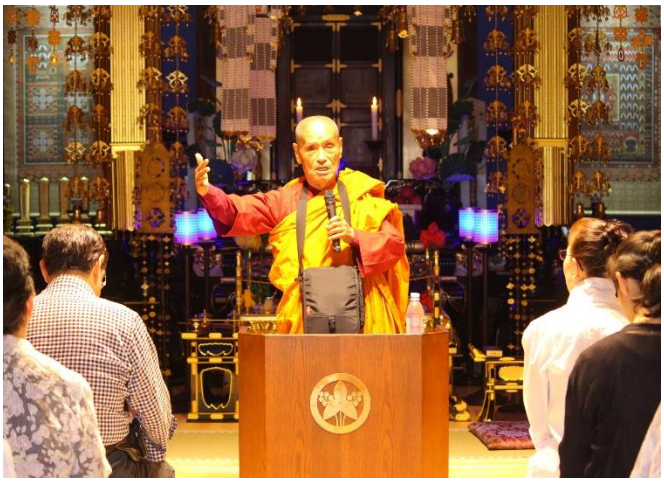
私は当時、ブッダガヤの大菩提寺といって皆様もご存知とは思いますが、お釈迦様が仏様としてお生まれになった所であります。仏陀生誕の地と。本来はルンビニーだとみんな言いますが、これは大いに間違っております。ルンビニーは、シッダルタといってお釈迦様の小さい時の名前でありますが、シッダルタという方がシャカ国の、ネパールのちょっと向こうにありますが、シャカ族の国でお生まれになって、その時にお付けになったのがシッダルタというお名前であります。仏陀の誕生は、仏陀が生まれた所、仏陀が成道した所ということをよく弁えていただきたいと思います。そういうことで、仏陀の成道した所は大菩提寺という大きな寺が建っております。世界仏教徒の総本山です。根本道場です。こちらでは真言宗は仁和寺とか、あるいは天台宗は比叡山とか、いろいろ総本山が各宗によって違っておりますが、全インドの宗派を問わず大小乗を問わず全世界の仏教徒が等しく崇める、等しく根本道場と認め、等しく総本山と認めているのは、ブッダガヤの大菩提寺である。

ブッダガヤという所は現在の地図ではビハール州と言います。中天竺と昔呼んでいました。天竺は、はじめは二天竺、北天竺と南天竺。だんだん時代が進むにつれて四天竺、東天竺、北天竺、西天竺、南天竺。玄奘三蔵法師の、中国のね、十五年間もインドを回って勉強してナーランダとかで、それで帰ってインドの言葉を中国語に訳した三大翻訳家の第一人者、玄奘三蔵法師。この人がいたころはインドは五天竺と書いております。東天竺と北天竺と南天竺と西天竺、そして真ん中が中天竺。この中天竺というのが、今言ったブッダガヤとか、お釈迦様が最初に説法されました鹿野苑、

鹿がいっぱいおります。今でもおります。その鹿野苑、サルナートといいます。初転法輪の地ですね。それからルンビニーお釈迦様が生まれた所。あるいはお釈迦様が亡くなられたクシナガラ。サーラ樹の下で八〇歳の齢をもって、アーナンダというお弟子に見守られて亡くなられましたクシナガラという所であります。そこらへん一帯を中天竺と言っております。当時の文化の中心地という意味もあったかもしれません。仏教の中心地、中天竺。地理的にはこれは北と東の天竺になりますが、ナグプールは本当に真ん中です。それこそ地理的にはインドのど真ん中。へそに当たるところです。そのど真ん中にあるナグプール。英領時代にはインドの地理を測量したことがあります。英国時代、全インドを測って中心地はどこであろうかと、測量しまして最後にナグプールが全インドの中心であると、大きな記念の石塔が建っております。これはナグプールが自他共に許すインドの中心地であるということであります。ですから昔のブッダガヤとかの中天竺という所とは違います。当時の南天竺の首都でありました。それよりも南は天竺とは言っておりません。ドラヴィダとかタミル・ナドゥとか現在のケルラとかカルナタカとか、そういう所はダクシン(南)・ドラヴィダとかいって天竺の内には入れていません。



その五天竺の中心地ナグプールに、オリッサの技師を招いて彫刻させておりましたが、私は今言ったブッダガヤの大菩提寺、これが必生の願文です。今必生(ひっせい)と言いましたが、これは私の必生(ひっしょう)不動明王であります。必生の願文とは、大菩提寺、全インド仏教徒の総本山である大菩提寺が、ヒンドゥー教の支配下バラモンの支配下に置かれている。これを仏教徒の手に還してもらいたい。言わば仏教徒から言えば奪還してでも取り戻したい、という運動を１９９２年から始めまして、ずーっと２０１６年まで運動を続けました。そのためにほとんどナグプールにはいないことも多く、その不動明王を作るオリッサの、これも有名な技術者です。彫刻師で政府から何級かの免状をもらって、オリッサでは名の売れた彫刻師でありました。しかし面白いことに、彼の名はアンタッチャブルという名です。名前がですよ。階級がアンタッチャブルというのか、不可触民の別名です。日本では昔は不可触賤民と呼んでおりました。これは違法です。賤の字を付けたら罰せられます。ですから日本では不可触民と呼んでおります。しかし日本でも今は、不可触民と呼ぶべきではないと思います。マハトマ・ガンディー翁は、こういう人を指して「ハリジャン」と呼んでおりました。神の子という意味です。ならばキリスト教であっても神道であってもどこに行っても神の子は神の子です。一切の人が上から下平等に神の子にならなければならない。それをですね、マハトマ・ガンディー翁はそうした不可触民と言われた見るも汚らわしいという人をハリジャンと呼んで、他の人は一切そう呼ばなかった。ここに於いてガンディー氏とアンベードカル博士。インド仏教再興の人。インド仏教は１３世紀に



過激派の回教徒によりインドを追われ寺々を壊され、ナーランダ大学に至っては3か月も燃え続けた。そういう大きな寺を焼き尽くし、何千人という坊さんを殺した。仏教が滅びてしまった。それ以来13世紀から20世紀半ば。ここに一人の、しかも一番下、非人間の非人間の非人間。これをインド語ではアティシュードラと言います。アウトカーストのアウトカースト、一番下。アウトカーストの中にも500から600のカーストがあります。バラモンの中にもカーストが200や300あります。すべて複雑なカースト制度があり、さらに人間だけではありません。蛇にもカーストがある。白蛇、白い蛇はバラモンと言っております。タクシャという蛇、タクシャシラーという町がありますが、これはクシャトリアとも言われ、毒蛇とも言われます。鳥にも何にもカーストがあります。複雑極まりないカーストの国であります。ですからそのアンベードカル博士が仏教を20世紀半ばにおいて復興した。奇跡と言えば奇跡、大奇跡と言わなければなりません。世界に何千万という坊さんがおる。何万ケ寺という寺がある。日本だけじゃない。アメリカにもあれば上海にもあればロシアにもある。しかも政治的な権威のある偉い人、仏教の僧侶もいる。しかしそういう人は、ただ外観から見ているだけで、インドに仏教を起こそうとする勇気と度胸がない。それでアンベードカルは、非人間の非人間の非人間から、それを復興した。もう勉強するにも教室に入っちゃいけない、水を飲むにも、のどが渇いてあそこにヒンドゥーの寺がある、寺の井戸で飲もうとすると、ぶん殴られる。寺から放り出される。そういう厳しい差別の中で、アンベードカルは勉強して、ついに藩侯の目に留まり、こちらにも岡山藩だとか津山藩だとかあるように、インドにも土地土地に藩があった。その中のある藩侯に認められて、アンベードカルという人は頭がいい秀才だと、非人間ではあるけれどもこれを勉強させてやりたい。ということでアメリカに送ります。そしてまたイギリスへと。その頃そういう階層の人は誰一人として海外に出て勉強することはできなかった。アメリカでご飯も食べないで勉強した。ご飯が無い。食べるものが無い。それでもアメリカにはそれほど激しい階級差別は無く、恵んでくれたり御馳走してくれたりして、勉強をつづけた。そういうアンベードカル菩薩が帰って、仏教を再興せしめた。仏教の本はアメリカでも読んだらしい。その前に、アンベードカルは憲法を書いた。インド初代法務大臣。初代首相はジャワハルラル・ネール。初代大統領はラジェンドラ・プラサード。インド独立の国士たちがずーっと取り巻いている。皆威厳のあるバラモン階級のやつばかりだ。その中にアンベードカルは、法律を勉強したところを認められてインド初代法務大臣となった。非人間の非人間の非人間と言われた人が、これも大きな奇跡です。インドが独立した。憲法が無ければならない。国の掟が無くてはならない。時のジャワハルラル・ネール首相は、閣僚を見渡し、学者を見渡し、あらゆる立場からその人物を見、考えたけれども憲法をつくる力量を持つ人はいなかった。ついにネール首相は、アンベードカルに「お前、憲法をつくってくれないか。」と告げた。ところが内閣の大臣たちからこういう声が聴こえてきた。「なんだ。アンベードカルに憲法をつくらせるだと。あいつは非人間だぞ。見るも汚らわしいやつだぞ。あいつの影を踏むのも嫌な奴だ。あんなやつになぜ憲法をつくらせるんだ。」と。するとネール首相は「じゃあお前たちつくれるんだったらやってくれ。」と。インドは広いです。日本の12倍の人口。インドの人種はいっぱいあります。アーリヤ人だとかドラヴィダ人だとか、蒙古族という人もおればナーガ族という人もいる。あらゆる種族が、言語も州州によって違う。グジャラート、ベンガール、タミル・ナドゥ、ケルラ、オリッサ。それから暑さも気候も違う。カーストが何千とある。そういう大きな国、そうした複雑な国をどうして一つの共和国にまとめる憲法ができる、つく

れる者がおるか！

誰も、うんともすんとも言わない。ついに不承不承、アンベードカルが憲法起草委員長に選ばれた。委員は十一名。しかし他の奴はアンベードカルの力量を見て、とても叶わない。アンベードカルの学量、歴史学に秀で、地理学に秀で、法律学に秀で、あらゆる学問に秀で、何一つアンベードカルに対して。受け答えができない。誰も黙ってしまってアンベードカルの憲法起草委員会に出席しなくなった。しかしアンベードカルは屈しない。この時だ！不可触民の解放を条文に入れる。インドを平等の国にする。「かしこまりました。私がやりましょう。」夜も昼も誰も出てこない、委員会には。アンベードカル一人が、もう本当に畢生だな。必生不動明王。必生の情熱をもって、必生の活力をもって、綴り上げた憲法！これを大臣の前で、大統領の前で、見てくれと。素晴らしい憲法。インドの憲法が出来上がりました。バラモンもつくれない。クシャトリアもつくれない。バイシャもつくれない。シュードラもつくれない。アウトカーストも誰もつくれない。非人間の非人間の非人間が、インドの憲法をつくった。これは大奇跡です。先ず外国においても誰もいません。アメリカのリンカーンが貧しい立場から大統領になり、奴隷解放をしたということはあるが、この複雑なインドを一本の絆を糸をもってつくった。誠にこれがインドの憲法である。

その後アンベードカルは仏教を復興した。ところが、ところがだよ。仏教を復興した場所はナグプールであった。ここがアンベードカルの偉いところです。ボンベイでやってくれ、デリーでやってくれ、しかし偏った所ではしない。皆さん、ここは真言宗のお寺です。大日如来様は普門総徳と言います。あまねく照らす、普照。東西南北隅々まで。

昇りゆく朝日は、強い光を持っている。突き刺すような光を放っている。日蓮はその朝日に向かって清澄山の山頂に上って、お題目を唱えて日蓮宗を立教開宗した。法然、親鸞は、西方極楽浄土の阿弥陀様がおわします、落日観という観法があるが、西に沈む夕日とてもきれいで美しい、本当にさわやかな身に静まれるような光。しかしこれらは一方しか照らさない。ところがこの真ん中の、曼荼羅の中央だ、大宇宙の真ん中に大曼荼羅の真ん中に、大日如来は普照です。しかし感謝されない。暑い時は暑いと言われ、寒い時は寒い。早く隠れてしまえ、などと文句を言われる。インドは今48度です。もう暑くてしょうがない。しかし太陽がなかったらどうにもならん。そういうことは知っているんだけれども、暑いと言われ感謝されない。宮沢賢治の詩にもあるように、西に行って何々をやり、東に行って何々をやり、南に行って何々をやり、デクノボーと呼ばれ感謝もされずというような、雨ニモマケズ風ニモマケズというような詩がありますね。そういう大日如来の中天、しかし普照。普門総徳と言います。すべての徳の力を持った、阿弥陀の力を持ち、お釈迦様の力を持ち、阿閦如来の力を持ち、宝生如来の力を持ち、あらゆる三世諸仏の総力をもっておる、これを普門総徳と言います。すべての徳を持っておられる。中天、大毘盧遮那、普照と言います。大毘盧遮那仏。その真ん中の地、インド中央のナグプールで、時は1956年10月14日、60万の人々を従えて、ブッダンサラナンガッチャーミ、ダンマンサラナンガッチャーミ、サンガンサラナンガッチャーミ、三帰と五戒文を唱えた。不殺生戒、不偸盗戒、不妄語戒、不邪淫戒、不酷酒戒。これが仏教の規範です。日本の人はお酒を飲んでおる。これは国会において神道も酒を飲むから仏教も許すと言っておる。（編集部注：明治5年太政官布告のことか）不殺生戒も、大東亜戦争、日露戦争、日中戦争で殺生をした・・・。

そういうお釈迦様の教えを持って、平和のインドのともし火を手にした。インド平和への礎をつくった。今世界は日本にしろインドにしろ世界各国の国々が、未来がないような大変な時代になっておる。もう政治家たちが泥棒呼ばわり、お前が泥棒だ、お前が泥棒だと聞くに堪えない悪口を言い合っている。いつ戦争が突発するかもわからない。北朝鮮はミサイルを日本に向けている。いつど

うなるかわからない状態である。そういう時に仏様の教えを持って、ヒンドゥーの教えは弓をつがえた本尊や刀を振り上げて人を切っているこれが本尊である。戦の神。これでは平和は来ない。仏陀は泰然として全国民を教化している。平和の使徒だ。今世界では釈尊を「平和」と呼んでいます。平和が仏陀の代名詞です。これは仏教徒だけではない。もう戦争は止めなければいけないという願いは誰にもあるが、止めるに止めれない、いつ降りかかってくるかわからない。回教徒も思っている。キリスト教徒も思っている。ヒンドゥー教徒も思っている。仏教徒も思っている。あらゆる宗教の人は、平和という言葉を出す。あらゆる指導者も平和という言葉を発する。しかし、平和はやってこない。益々危険な世の中、まあ仏法では末法と言って、末法思想が広まっている。宗教の名はあっても、益々険悪な世界になっている。そういう時に仏陀が、平和として全宗派に全宗教に呼ばれている。仏陀か戦争か、戦争か仏陀か。平和か戦争か、戦争か平和かと以前は言っておりました。しかしこの頃は仏陀か戦争か、戦争か仏陀か。もう平和の代名詞として回教徒も呼んでいる。キリスト教でも呼んでいる。すべてが思っている。そういう基盤をインドに置いた、ビームラーオ・アンベードカルという人はすごい人である。菩薩というか大菩薩と呼んでおります。この菩薩号は、ノーベル賞みたいに偉い人からもらったわけでもない。国の首相からもらったわけでもない。外国の大統領からもらったわけでもない。貧しい貧しい民衆が、贈った。飲まず食わずの民衆が、人間となった。人間生命としての復活を成し遂げた。これはアンベードカルのおかげであります。皆アンベードカルと言えば涙を流して手を合わす。そういうわけでアンベードカルは仏教を復興した。

　ところが大菩提寺、仏教の総本山は今でもバラモンが支配している。この間の４月１４日はアンベードカル博士の誕生日でありました。どこでどう会議を開いたのか、ブッダガヤに集まって大菩提寺を取り巻いてしまった。仏教徒たちも毎年毎年大勢の人がお参りするんだけれども、全部寺の中から追い出されて、ポカーンとして見ているしかなかった。そういうような訳で、ずーっと１９９２年から２０１６年まで、大菩提寺奪還運動を全インドに展開しまして、すべての人が参加した。しかし政府は何もしません。皆政府はヒンドゥー教ばかりで、回教徒がいても少しだけ。それでも私はやってきた。

　そういう最中にオリッサの彫刻家が小さいのを連れて、あの石像を刻んでおった。私の最初の注文は、未来に向かってインドの平等世界を開建する若い青年を造ってくれよと、頼んでおったにもかかわらず、私が何か月間か過ごして帰ったところ、「なんだこれは？お前、インドの青年じゃないじゃないか。誰だこれは。」「あんたです。」「なに俺？ばか者！インドの青年と言ったじゃないか。」「しかしインドの青年にそんな青年は見当たりません。それであなたにしました。」「冗談もほどほどだぞ、お前。光研和上が知ったら俺は怒られるぞ。造りなおせ。」「いやもう他にはおりません。どこを探していてもインドの未来を背負ったようなのはおりません。これで造らせていただきます。」しょうがないなあ、もうお造りしますというから、あれは俺じゃないんだよ。必生不動明王というお不動さんなんだよ。だけど顔が似ているからねえ。それでまあ、送りまして、御前様に見せたんだ。これは俺に似ているんだけど、御前様が言った未来を背負って立つような雄々しいインドの青年の面構えを刻んでくださいと言ったんだけど。御前様は「いいよ、これで。」と言われてね、もう送ってくれということで、今建っています。そこに。

　私じゃないんだよ。皆そう思ってくれるなよ。私はね、ただの一人の坊主です。不動明王なんて奉られたら、返って私の菩薩行が成り立たん。私は民衆と共に、崇められたらいかん、民衆と共に、真っ黒になって歩くのがいいんです。そのおかげでインド民衆も、インド仏教徒の総本山ナグプールの改宗広場、大きなストゥーパ世界一のストゥーパが建っております。アンベードカルカレッジが、４つも建っている。その管長にですね、私が選ばれた。俺はびっくりしちゃってね。それで今お粗末ながら管長をやっています。アンベードカルカレッジの教授連や学長なんかを任命しなきゃいかん。同時に全インドの仏教徒を鼓舞して、この間なんかは一番南のタミル・ナドゥ、スリランカのちょっと上のところ

で、４０００人のヒンドゥー教徒を仏教徒に改宗する導師に呼ばれております。また毎年の大改宗記念日には１００万人を超す全インドからの人がナグプールに来ます。足の踏み場が無い。私の寺なんかは入られない。道端にみんな寝ている。我々はご飯を作るためにお米を集めないといけない。ご飯を作るために青年たちを動員して皆ご飯を炊かなきゃいけない。各寺々がそうなっている。改宗広場は足を踏み歩く土地も無いほどです。そこで私は毎年3日間、改宗式を行います。デリーから来た人、グジャラートから来た人、若い青年が、インドの青年はすごいぞ。皆仏教旗を持って「ジャイビーム！」ジャイビームとはアンベードカルの勝利、アンベードカルに栄

光あれ！ビームラーオというのがアンベードカルの名前です。ビームラーオ・ババサヘブ・アンベードカル。

「ジャイビーム！バンテージー（和尚さん）」我々は改宗をやっている。お前どこから来た。ケルラから来ました。こっちはデリーから来ました。アッサムから来ました。「よし」ということで改宗さしました。免許状を渡します。改宗したという、私のサイン入りで免状を出します。そういうことでインドは仏教再興です。

日本では仏教の学問をあまりしていません。仏教が何かもわかりません。「お前は何の宗派だ。」「知りません。お父さんお母さんは拝んでいます。何か仏壇があるようです。私は無宗教です。」「何言ってるんだよ！お前の家が曹洞宗なら曹洞宗だろう。」「私は無宗教です。」こういうやつばかりが日本から来ている。タイなんかはそうじゃない。皆それぞれ勉強している。それでね、インドでは１０歳から上まで、去年８０００名の人を広場に集めて試験をした。仏陀はどこで生まれたか？アンベードカルが書いた「ブッダとそのダンマ」という本があります。これがインドではバイブルとなっています。釈尊が生きていたならばこういうことをされたであろうな、という本当の釈尊のブッダ伝をアンベードカルが書いた。ブッダはどこで生まれた？どこで成仏した？八正道は何だ？こういうことを次々項目を付けて８０００名を試験しました。これは新聞に載りました。今年は５０００名、もう終わっちゃった。1等2等3等と分けて小さいのから賞状をあげて、何点以上は合格者だと合格者には全部褒美をあげて賞状をやって、２０００名にやった。私は毎年これを続けるぞ、と新聞記者に言明いたしました。新聞記者はそれを大きく取り上げておりました。

そういうわけで仏教学、学校の勉強は別だ、この仏教学を小さい内から教えなきゃいかん。

今何時ですか？もう時間が来たか？じゃあね。もう時間が経ったようだよ。もっと話したいことは重々なれど、私の受け持つ時間となりました。これを持って私の皆様に対するお話といたします。まだまだ言いたいことはいっぱいあるんですが、インドの子どもたちがいかに小さい子供であってもブッダンサ

ラナンガッチャーミと言っているか。お寺に行ってね、生まれたばかりのような子が、お母さんがみんな教えるんだ。そういうことを言いたいのはやまやまだけど、どうも、ありがとうございました！

（拍手）

あのね。御前様の仰せでございます。パーリ語というのがあります。こちらでは南無仏、南無法、南無僧と言いません。２５００年前にお釈迦様の地方でしゃべられたパーリ語という言葉で唱えます。これを世界の仏教徒は皆知っております。日本の方もだいぶ知っております。私が言いますから、あなたたちは合掌してだよ、こんなことしてじゃないよ、合掌して大きな声で、虎が吠えるような声でやってくれ。

ブッダンサラナンガッチャーミ
ダンマンサラナンガッチャーミ
サンガンサラナンガッチャーミ
再び
ブッダンサラナンガッチャーミ
ダンマンサラナンガッチャーミ
サンガンサラナンガッチャーミ
三たび
ブッダンサラナンガッチャーミ
ダンマンサラナンガッチャーミ
サンガンサラナンガッチャーミ
ありがとうございました！

（編集部にて書き起こし）

インド訪問記

昨年末から今年にかけてインド・ナグプールを訪れた方からの寄稿です。

わが街ナグプール

岸信一郎

ナグプールに来たのは全くの偶然で、バンテージにお会いできたのも、今思えば本当に幸運でした。

以来、毎年2、3ヶ月、最初はバンテージのお勧めもあって、後には半ば押しかける形でゲストハウスにお世話になるようになりました。

当初、窓が壊れた、そのホコリだらけの部屋にはビックリしましたが、その後バンテージのお許しを得て、来るたびごとに多少手を入れて、おかげで結構暮らしやすい部屋にすることが出来ました。

ゲストハウスのある地区はベーゾンバーグと言います。西隣はメコサバ・クリスチャンコロニー地区。バンテージがいらっしゃるインドラ寺はインドラ地区にあります。さらにそこからナラロードをはさんで東側がニューインドラ地区となります。

バンテージが初めてナグプールに来た頃は、何れも無法地帯の物騒な地区だったと聞いています。バンテージの布教の第一歩は、インドでも最底辺の街で始まった訳です。

しかし、今ではその街もナグプールでも珍しいほどの穏やかで平和な街になりました。

この半世紀の間に、バンテージを指導者に仰いで、ナグプールの仏教徒たちが、どんな闘いをされて来たのか、今の私にとっては、想像するしかありませんが、差別と貧困の絶望状況の中でも希望を失わず闘い続けて来たことだけは間違いありません。

インドラ地区周辺は圧倒的に仏教徒の数が多くを占めます。彼らの第一印象は、良く言えば親切、悪く言えばお節介やきですが、おおむね善良で人生に前向きな人たちだと言えそうです。

滞在中はいろんな人に助けてもらいました。

ゲストハウス隣のオッサンには、よくバイクで拾って貰いました。前の家の老夫婦には、毎日の食事の心配を度々して頂きました。極貧の中二人の子供を大学に進学させた頑張り屋さんです。私の滞在中にヒンディー語を教えてくれたのは斜め前の家の大学生とその従兄弟の中学生です。彼は医者を目指している秀才君です。

ベーゾンバーグ地区だけでなく、インドラ地区でも、ニューインドラ地区でも私の滞在中お世話になった方たちは数え切れません。中でもとりわけお世話になったのは、私が、桜ハウスと呼んでいる家の家族です。60年以上は経っていると思われる平屋の一部を改修した古い家に一家9人で住んでいます。初めての訪問はランチのお誘いがあったからですが、お返しに果物と多少の食材を買い求め、付き合いが始まりました。

とても裕福とは言えない家でしたが、驚いたのはその人付き合いです。とにかく訪問客が多いのです。何人親戚がいるんだと言いたいくらい、これが妹、これは弟、あっちは従兄弟で、こっちは伯母さん。同僚やら、友人やら、仕事のお客さんとやらで、人の流れが途切れることがありません。1時間いる間にお客が10人を超えるのは珍しくありません。その客人たちも、いったい何の用事で来たのか、食ったり寝たり時に大声を上げたり、まるで自宅にいるように振る舞っていて遠慮がない。しかも家の当主たちがそれを当たり前のように受け入れているのが不思議でした。

今日はどんな人がやって来るのか？

アル中の男か、借金で首が回らなくなった例の奴か、新米の学校の先生か、ひょっとしたらイバリくさったあの警察官か。それが楽しみで何度も出かけて行くようになりました。そしてついには私自身が家族の一人になったように寝泊まりするようになってしまいました。

お祝いごとがあれば隣近所中で集まり、救急車で運ばれる者が出れば誰であれ手の空いた者は病院に駆けつけ看護する。私も2晩ほど徹夜の看護につき合いました。日本ではとうに忘れられた「共に生きる世界」がそこにはあったのです。

子どもたちとはよく買い物に出かけました。大通りの向うはジャリパトカ地区と呼ばれる商店街で、野菜のマーケット、米屋などの食品店、電気屋、薬屋が続きます。もちろん大きな病院やモールもあります。ただまともな食堂、レストランが少ないのが欠点ですが、商店街入り口近くのマサラドーサの店と中心部の交差点近くのチキンビリヤーニの店はお勧めです。どちらも畳一畳ほどの小さな店でほとんど露店といってもいいほどですが、ドーサはヒンズー教徒の親子が、ビリヤーニはムスリムのおばさんがやっています。両店とも早く売切れますが、閉店間際に行く私のため賄い分を出してくれることが度々ありました。

服やカーテン、カーペットが必要ならカマラ・マッチングがお勧めです。品揃え豊富で価格もリーズナブル。周辺の高級店にくらべて半値、ただし値引きはしてくれません。私は、この店を「正直屋」と呼んでいました。

小金を持った日本人だから歓迎されるんだよ、とよく言われました。私も当初はそう思っていました。しかし違いました。この街の人たちは、仏教徒に限らず、ヒンズーやムスリムにもとびきり人なつっこい人が多いと感じます。

ゲストハウスの2階の部屋の壁に「仏国土、云々」と書かれた色紙が掛けられています。おそらく訪問客のお一人が置いていったものだと思います。最初は辛気臭いなと思って気にも掛けませんでしたが、そのうちに気付きました。「仏国土」があるとすれば、ここではないか、ナグプールの街のことだ、といつしか思うようになったのです。

龍樹が書いたと言われる(?)大智度論の中に「舎衛の三億」という言葉があります。舎衛とは釈迦が25年暮らしたコーサラ国の首都のことです。(バンテージはナグプールに50年以上暮らしています。)

釈迦が25年も暮らした街でも釈迦に会ったことがあった人は三分の一に過ぎず、残りは知ってか知らずか無関心だったと言う訳です。布教の難しさを表している言葉だと言われますが、ナグプールに度々来るようになって、「仏国土」とはそもそもそういうものだと思うようになって来ました。

全員が仏教徒になったからといってそこが仏国土になるとはかぎりません。むしろ、全体主義の宗教国家では仏教とは相容れない世界となります。また仏国土は、見果てぬ夢の理想郷でもない。仏国土は自分の足元の現実世界にある。バンテージが身をもって示した、強靭な意志力による弛まぬ闘い、そして強い連帯、それがあれば、私達の「今現在」の中にのみ、仏国土は確かに生まれるものだと確信しました。

貧乏人はもちろんのこと、アル中、喧嘩、かっぱらい、そして異なる宗教の信奉者が仏国土にいても少しもおかしくない。仏国土とは、そういった人間の宿業ともいうべきものを呑み込んで、うねりをあげて流れゆく人間連帯の潮流そのものだと思うからです。

ときに闇と見える、時に光り輝く毎日の現実世界こそ仏教徒を育む大地であり、揺籃です。

泣いて笑って、絶望し、時に喧嘩し時に励ます。逃げ出したくなる気持ちを抑え、最期までともに生き抜く、「必死」ならぬ「必生」の街、私の見たナグプールとはそういう街なのです。

家族で佐々井上人に会う

濱野剣

「龍族に佐々井上人と家族で会ったことを寄稿して」

昨年末に佐々井上人の元に奇妙なご縁でご一緒させて頂いた小池さんから電話があった。

小池さんに言われ快諾をしたものの暫し悩んだ。

決して敬虔な仏教徒でもなく、本音を言えば宗教の教えが団体になると違う物に変化していく困難さと必然性を感

じていたからである。
しかし佐々井上人の事は大好きであり、お会いした時に佐々井上人から信じる道を、正直に生きろ、そんな思いを受け取ったので、お弟子さん達からは「こいつは何て失礼な奴なんだ」と思われようが正直に思いのまま綴ってみようと思った。
ご存命な内に会わねば、そんな唯一の爺様が僕にとって佐々井上人であった。
佐々井上人の事は著書「必生　闘う仏教」で知った。
自身の元々の性質なのか地位や名声で人を判断することもなく、虚飾や虚栄は苦手で、違和感として直ぐに感じ取ってしまう、それは様々な本でも同じで

無頼派、純文学を好んだ理由でもある。
「必生　闘う仏教」は僕にとって真に無頼派、純文学で著書から生きることに正直で、虚飾や虚栄を感じない人間性、吐き出すかのような魂の叫びを聞き、読み終わった時の衝撃は大きく、「こんな凄い日本人が居たのか」とつい呟いてしまい、御多分に漏れずユングが提唱した「永遠の少年」的だが僕のヒーローに佐々井さんはなっていた。
それから数年、日々忙殺されながら「必生　闘う仏教」を読んだ時の衝撃も記憶から削られていった、そんなある日名古屋の金龍寺で佐々井上人を囲んで座談会があると聞いた。
この時も前述した通り、お弟子さん達が沢山居る中、僕なんかが行っては失礼ではないか？
そんな思いもあったが、こんな凄い生き方をする人の生の顔を、空気感を感じたい、そんな好奇心が勝り金龍寺へ向かった。
佐々井上人が集まった人達の前でカースト制度廃止活動、インド仏教最高指導者になった経緯等のお話をされた。
後ろの席から見た佐々井上人はとても小さく生命力が弱く見えた。
しかし、暗殺されかけた話、若い頃特権階級とぶつかり「何だコノヤロー」となった話、諸外国の女性が綺麗だった話、そんな話をされる佐々井上人の顔は生命力を帯び、少しヤンチャなお顔をされていた。
その瞬間人間臭さを感じ、この人のカースト制度廃止活動も全部ヤンチャな童心のままの憤りや怒りが根幹なんだと理解し僕は大好きになった。
勿論生半可に生きてきたお顔では無く、覚悟をして生きてきた人のみが持つ厳しい目と子供の様な無邪気な笑顔があった。
お会いした最後に「今度インドに会いに行きます」と伝えると「待っとるよ」と言われた。
勿論日々沢山の人と会い僕など覚えている訳もない事は承知だが、行くと約束した以上約束は果たさねばと2019年12月小池さんとご一緒しナグプールへ向かった。
意気揚々と、少しの緊張と共に佐々井上人とナグプールで遅めのランチをした。
ランチで初めて佐々井上人に会った娘2人と妻。僕が佐々井上人の半生を伝えたり、凄い人だと道中話していたので下の娘以外は少し緊張していた。
下の娘は6歳だったので人の行った凄さは理解できず佐々井上人とお会いしても近所の仲の良いお爺ちゃんに会っているような感じだった。僕は佐々井上人が虚飾を嫌う方だと感じていたので敢えてそのままにしていたが下の娘を見る佐々井上人の優しい目から「子供が大好きなんだ」と感じる事ができた。

12月31日佐々井上人と年越し蕎麦を食べる為夜の寺院へ向かった。
アンベードカル博士像が大きく飾られた寺院と日本の寺院との大きな違いに衝撃を受け、佐々井上人の「座って半畳、寝て一帖」を具現化した物置と一緒になった部屋には更に絶句した。
115年振りの大寒波のインド、すきま風が入るこの質素とさえ言えない部屋、『全てを人の為、仏教に捧ぐ』を全うし

ている佐々井上人からしたら当然かもしれないが、僕にとってインド仏教の最高指導者なので生活は実は厚遇なのかも?との浅はかな思いを深く恥じた。この夜の佐々井上人は少しお疲れの様子であったが小池さんとの昔話にクシャクシャな笑顔と共に花を咲かせていた。

翌朝1月1日4時「シルプール遺跡に行こう、わしも一緒に行く」とのお言葉から約8時間の車旅が始まった。車中、佐々井上人からアウトカースト、闘いとも呼べるインドでの活動、インドの現状、様々なお話を聞かせて頂いた。驚くべきは昨夜誰も睡眠時間が取れない中、佐々井上人だけが車中殆ど眠らなかった事と弟子の般若菩提さんが道中のご飯にと作ってきた炊き込みご飯やおかずが日本の母の味であった事。行く先々で地元の人達は佐々井上人を尊敬の眼差しと笑顔で迎え、仏教だけではなく佐々井秀嶺一個人が深く人々の心の支えになっていた。それは我々家族も一緒で佐々井上人と一緒だった3日間は僕の家族にとっても沢山のお言葉を頂いた至福の時であった。

「人間は天使でも野獣でもないが、不幸なことに天使たらんとすれば野獣になってしまう」　　パスカル

人助け、支援する側にとっては最も意識し気をつけなければいけない言葉だがバンテージから「人間なんて大したものではなく、煩悩のままだよ、だからこそ目の前の事を必死にやれば良いんじゃないかな」

掠れたお声だが深く心に染み、空港で見送って頂いたバンテージのお姿が見えなくなった時、後世に子供達にバンテージの思いを繋げる事が恩返しだと理解した。

ナグプール訪問

藤田龍信

私は昨年の11月29日にナグプールに到着し、それから三週間、ほぼ毎日のように佐々井上人に接する機会を得ました。インドに五十年以上の歳月を日本人僧侶として様々な活動を、革命家の様な人生を生きて来られた方がいると言う、それだけの知識しかありませんでしたが、心が惹かれるので何かあると思い訪ねさせて頂きました。

その日は出かけておられて会えませんでしたが、亀井龍亀さんに親しく接して頂きました。いろいろ初めてのインドですから不安もありましたが、安心してその日はホテルで休むことができました。翌翌日には佐々井上人と会う事が出来ました。インドラの寺院は全く日本の寺と様子が違います。木造でなくコンクリートとタイルで出来たら建物でした。狭い急な階段を3階に上がりました。細長い部屋に、物置かなとふと思いましたが、そこに本とか新聞紙とか重ねてあって、まさか、そこにバンテージは座しておられました。慈悲に満ちた笑顔で迎えてくださり、緊張感やあれこれ思う心がすぐに消えて仕舞いました。よくみるとやんちゃな子供の様な、遊び相手にでもなるよという親しさを感じられもしました。本当に尊いお方に会えたな、と感慨深いものがありました。日本で佐々井上人の講演会のパンフレットをみて会いたいなと直感的に思い、それが六月でした。講演会には間に合わなかったのですが、七月には佐々井上人のお弟子さんと東京で会うことができ、9月には亀井さんと連絡がとれました。 不思議としか言いようのないスピードでお会いする段取りが出来てしまいました。

次の日からは朝6時にはインドラ寺院にタクシーに乗り朝のお勤めに参加しました。ウーバーのアプリでタクシーが呼べるのが流石と思いましたが、工事現場の周りには家族連れなのか、老人から子供まで寝ている姿を見ると、貧しさの度合いが違うなと胸が痛みました。テントを道端にたてそこで住んでいる人も多くいました。不思議なことに誰もが携帯電話を持っています。そのアンバランスなところがインドらしい貧しさなのかとも思われました。

私の方は最初からバンテージに在家得度を勧められましたから、深刻です。まるでわからないヒンズー語のお経には閉口しましたが、龍亀さんが日本語訳のテキストをプリントして下さいました。そしてそれから一週間後には得度式を

して下さいました。まるでお経が読めないので強く叱られましたが、後について読経しなさい言われ、緊張しましたが、無事に式を終えることができました。その広い敷地にある寺院はまだ新しく日本の篤志家のかたの寄付で造られたもので、近くの土地も買い取られ、なかなか素晴らしい所でした。そこを管理するご夫婦がよくバンテージに仕えておられました。怒られたり、指示をされたり、バンテージの話されている内容は私には分かりませんでしたが、なかなか仕事が進まない難しい現実のなかで、それでも全てに責任を持って忍耐しながら処しておられるバンテージ、それを補佐される龍亀さんのおふたりの姿を見ることも出来ました。

ご自分の心のなかにある慈悲の心に突き動かされながら、全てを許して、自分がやらないと誰もやってくれない現実であっても、それ以上の固い決意で歩んでおられました。

この期間毎日のように車に同乗させて下さり、たくさん話して下さいました。車の中にバンテージが居るのを見て近くの車から深深と挨拶される方もよく見かけました。歩いていると靴を脱いでひざまずいてバンテージの足に手を当て、敬礼を捧げる婦人達もいました。民衆に寄りそうという本当の姿を見ることができました。早くまたインドに帰り、私もバンテージの目指すところを深く知り、せめて友達にでもさせて頂きたいと思っています。

龍族に寄稿お願いします。

佐々井上人のこと、インド仏教のこと、遺跡や龍樹菩薩についてなど、ぜひ「龍族」に文章を寄稿ください。
※掲載誌を数部贈呈いたします。
※原稿料等はお支払いしません。
※内容によっては掲載されない場合もございます。

南天会メールアドレス
nantenkai@gmail.com

「佐々井上人とオンライン交流会」開催しました。

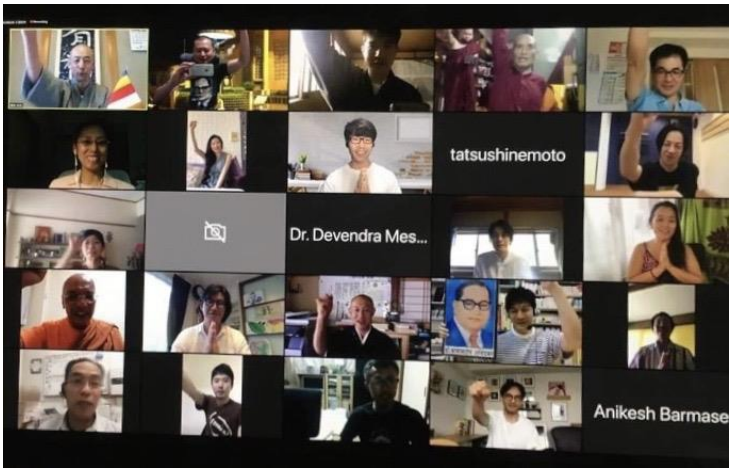
６月２０日

新型コロナウィルス感染拡大の影響により、本年の佐々井上人の来日が叶わない中、Zoomを利用してオンライン交流会を開催しました。

当日はインドから佐々井上人にも参加いただき、４０名の参加者と画面上で交流しました。最初に佐々井上人から、ロックダウンが続いているインドの状況をお話しいただき、その後一人一言ずつ挨拶を交わしました。最後にお弟子の高山龍智師の掛け声で、世界初（？）となるオンラインでのインド、日本、アメリカ同時の「ジャイビーム」三唱を行いました。

初めての試みで、うまくつながらないこともありましたが、1時間半楽しく会話することが出来ました。なお、フェイスブックとホームページのみでの告知となり、会員の皆様全員にお知らせすることができず、申し訳ございませんでした。

今後もこのような形での交流会を企画して参りますので、ホームページ等で確認いただき、是非ご参加ください。



ジャイビーム！ジャイビーム！ジャイビーーム!!

インド現地報告

亀井竜亀

インドでは3月25日からロックダウン(都市封鎖)が行われている。生活に必要なお店以外は完全に閉鎖となり、仕事も中断された。

４月７日からインドラ寺では生活困窮者に対して食事の提供を始める。その時点ではナグプールのコロナ感染者は１８名であった。

６月１５日現在では９５３名が感染し１６名の方が亡くなっている。インド全体では３０８９９３名が感染し８８８４名の方が亡くなられた。急激に感染が拡大している。

ロックダウン中に仕事を失った数千万人もの出稼ぎ労働者が生活困窮に陥った。故郷に帰ろうにもバスも汽車もストップしたままであった。多くの人達が数百キロ離れた故郷まで歩いて帰った。インドラ寺が運営するナーランダホステルを拠点に１日４０００人分もの食事を作り、歩いて帰る者や路上で寝起きする困窮者に配って歩いている。昼は１０時半から、夜は１８時半から食事の提供を行なっている。食事に使う野菜やお米はインドラエリアに住む住人を中心に寄付で賄っている。活動が広まるにつれて他の地域や仏教徒からも寄付が集まってきているが現状は非常に厳しい。いつまで続けられるかわからない状況である。

しかし、ロックダウンが６月３０日まで続くことが決定され食事を求めて連日、ホステルの前には長蛇の列が作られる。中には子どもの姿も見受けられる。皆、布で顔を覆うかマスクで対策をしている。昼は野菜の混ぜご飯、夜は野菜スープにご飯にチャパティを提供する。家族の為に5人、8人分と持って帰る者も大勢いる。2ヶ月以上ボランティアで続けるスタッフも疲労困憊である。しかし、社会が元通りになり生活困窮者がなくなるまで食事を作る手を止めるわけにはいかない。

７月1日からロックダウンが緩和された。しかし、人が集まる集会やレストラン、映画館等は引き続き禁止、封鎖されたままである。飛行機の国際線についても引き続き再開のめどは立っていない。

ナグプールではロックダウンが徐々に緩和され以前のような賑わいが戻りつつある。しかし、以前と風景があきらかに違うことは行き交う人々が布を顔を覆ったり、マスクを着用したりしていることだ。また人々の間にも互いにコロナに感染していないか不信が蔓延している。

７月５日満月の日、佐々井上人に長年、部屋のお掃除、食事、洗濯と大変お世話されてきたフムネバイ(フムネ姉さん)が脳梗塞の為亡くなられた。私も初めてナグプールを訪れた時から大変お世話になった方だ。亡くなる前日まで、普段通り朝6時半にインドラ寺に来られて佐々井上人の部屋を綺麗に掃除をされていた。今でも彼女が洗って干してくれていたタオルが乾いた状態で静かに語りかけてくる。

※7月11日現在、インドは新型コロナウィルス感染者数が82万人(死者数22000人)を超え、アメリカ、ブラジルに続いて世界で3番目となっている。今までは主にデリー、ムンバイといった大都市での流行だったが、出稼ぎ労働者の帰郷等によって地方でも感染が拡大している。

7月1日にロックダウン(全土封鎖)が緩和され、州を越える移動が可能となり、国内線も再開された。しかし北部ウッタル・プラデーシュ州などでは封鎖措置が続くなど、貧困地域、医療体制の整っていない地域では、厳戒態勢が続く。7月9日には、マンセルで6名の感染者が出て、町がロックダウンとなった。(編集部)

【亀井竜亀インド滞在支援】
ゆうちょ銀行
口座番号　01390-3-107440
加入者名　亀井竜亀
※その他の金融機関から振り込む場合
ゆうちょ銀行一三九支店(イチサンキュウ)139
預金種目:当座　　口座番号:0107440
滞在支援隊としていろいろな業務をお願いしているお弟子の亀井竜亀さんへのご支援もよろしくお願いします。

パウニ大仏復旧へご支援願います

厳戒態勢の続くインドですが佐々井上人はインドラ寺の皆さんと失業者・生活困窮者への支援活動を続けておられます。そんな中4月に起こった巨大暴風雨の影響で、ナグプール近郊のパウニに建設中の大仏が倒壊し、その復旧のため日本からのご支援の要請が届いています。

以下佐々井上人より。

「13m大仏像復旧支援金のお願い

パウニで建設中でありました大仏像が4月29日の巨大暴風雨によって倒壊致しました。昨年7月24日に頭部部分の設置を完了し法要を済ませ本体にコンクリートを流し込む作業を進めている最中でありました。今回倒壊の悲報を聞いてロックダウン中ではありましたが警察署長より特別許可を頂き技術者と共に現場へ駆けつけました。現地仏教協会メンバーと技術者と復旧について話し合いを行い、まずはクレーンを手配して大仏を起こし損傷具合を確認する作業を行うこととなりました。

インドは5月中頃より雨季に入りモンスーンが訪れます。一刻も早く復旧作業を進めなければなりません。

日本の皆様、南天会の皆様の心よりの御支援をお願い申し上げます。」

支援金は南天会口座に振込いただければ、インドに送金いたします。

(パウニ)

ナグプール南東50キロ、聖河といわれるワインガンガ川沿いの町。1969年、この町のバラ・サムドラ貯水池の南で、B.C.3世紀マウリヤ朝時代までさかのぼるとみられるストゥーパが発見された。直径38.1メートル。バールフットのストゥーパのような欄楯の彫刻や寄進者名を刻した碑文なども出土した。その南600メートルのチャンダカプール村にはさらに大きな(直径41.6メートル)ストゥーパが発見され、これは同時代のサンチーの第一ストゥーパよりも大きく、ここが仏教最盛期における一つの中心地であったことを示している。

現在第一ストゥーパの上にはヒンドゥー教の寺院が建てられ、トルナー(塔門)や欄楯の残骸が野原に打ち捨てられている。倒壊した13メートルの大仏は、前者のストゥーパ跡西100メートルのところに、地元の仏教徒の寄進により、遺跡の重要性を認識する佐々井上人の指導のもと建設中であった。

佐々井上人

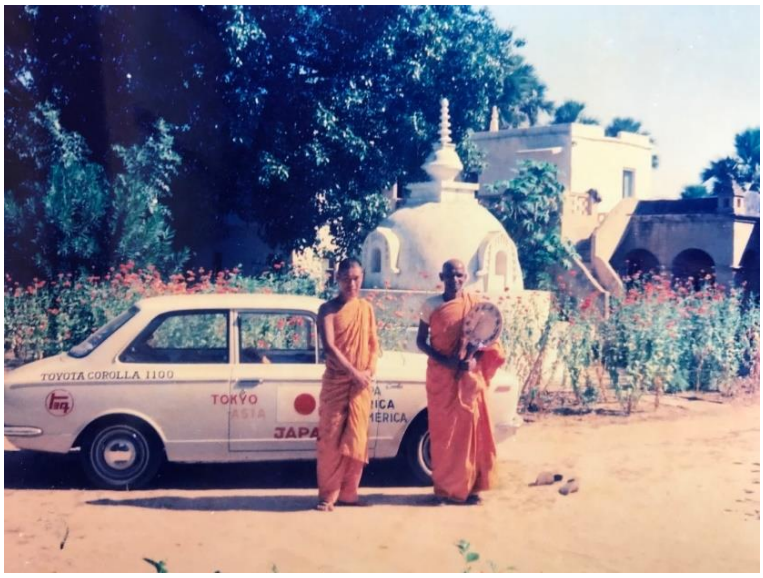
昔の写真特集

１９６７年、国産車で世界一周旅行の途中、インド・ラージギルに立ち寄って佐々井上人に面会された堤修さんから、当時の貴重な写真を送っていただきました。

当時佐々井上人は、日本山妙法寺の八木天摂上人について世界平和大塔建設に勤しんでいました。堤さんの車のタイヤがパンクして、夜遅くにお寺を訪ねると、門を開けて案内してくれたのが佐々井上人だったそうです。夕食をいただき、1週間ほど滞在して、八木上人や佐々井上人と夜を徹して話をされました。

堤さんは、たまたま佐々井上人が出演したテレビ番組（２月１８日放送日テレ「発言Ｘ」）を見て懐かしく思い、古いアルバムから写真を焼き直して、佐々井上人にお手紙と一緒に送られました。

↑霊鷲山と佐々井上人
当時ラージギルの山では、野生の虎が出没し、団扇太鼓で追い払ったこともあったという。



↑佐々井上人と当時唯一人のインド人僧
堤さんが乗ってきたトヨタ車の前で。

↑堤さんと八木上人

↑八木天摂上人

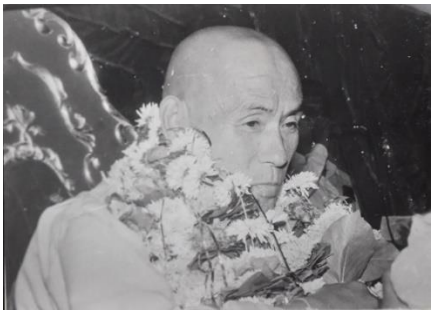
多宝山上で祈る　→
八木上人

↑1967年10月　佐々井上人32歳のころ
この翌年の8月8日、龍樹菩薩の御霊告に従い、単身ナグプールへ。
50年以上前の貴重な写真をお送りいただき、ありがとうございました。

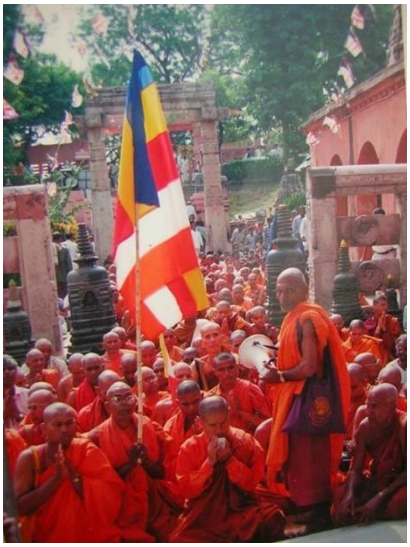
佐々井秀嶺資料室 デジタルアーカイブプロジェクト

南天会佐々井秀嶺資料室では、佐々井上人、インド仏教にかかわる古い写真や映像をデジタルデータとして保存するアーカイブ化プロジェクトを実施しています。これまで佐々井上人の保存資料（写真、映像データ、日記、原稿、手紙、新聞記事、書籍など）を撮影し、一部は日本に移送して保存しています。

佐々井上人の古い写真や映像をお持ちの方は、南天会事務局まで是非ご連絡ください。



ブッダガヤ大菩提寺奪還闘争
1992 年～



南天会会費・支援金(2020 年 4 月 1 日～7 月 15 日)　171万1048円

【特別支援金寄付者ご芳名】

※上記期間中に年会費とは別に支援金をいただいた方のお名前です。

赤木宥子　伊神玉蓮　石村庄右　伊藤友人　今村賢太郎　大岡千尋
大豆生田雄弘　岡本佳子　岡本博子　岡本ひろ子　荻須眞教　奥平心月
柿沼寿信　GAJBHIYE ROHAN　岸越秀任　工藤真奈美　窪寺伸浩　倉田順子
黒澤雄太　日本武徳院有志一同　小池一郎　小池誠　興正寺　河野太通
佐伯生子　坂田龍晴　笹部一眞　澤登拓　志賀浄邦　宍戸末美
嶋村可奈　白井昌子　新城晋一郎・さやか　諏訪原和幸　添田隆昭
高田厚信　滝川栄子　田口清紹　武田英敬　竹原路晴　武山博子
多田真祥　田中國芳　田中徳雲　谷口悦朗　田向常城　長泉寺　堤修
寺島狂児　土居奈生子　道順雄喜　遠山睦子　土岐信子　内藤了瑞
中原永昌　中村寛　西村馨　バガット・クンダン・カイラス　畠山るか
八田次郎　林剛平・ゆりか・太陽　原田裕介　福瀬くに子　藤原博元
錦織尚子　本多末男　松浦克彦　宮淵泰存　森下正志　米盛輝雄
渡邉晃　渡辺典子　陳薏如　（順不同　敬称略）

インドラ寺炊き出し、パウニ大仏復旧支援へのご寄付も含まれています。
その他、世話人・賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

あたたかいご支援ありがとうございます

（現地支援の状況）
佐々井上人の住坊インドラ寺では、4月7日から7月1日まで、1日2回4000食の炊き出しが行われました。これらのお米や食材は、インドラ地区の住民や仏教徒からの寄付で賄われ、ロックダウンが続く中仕事もままならず、貯蓄を切り崩して困窮者支援を行ってきました。そのような中、佐々井上人は南天会支援金からも食糧支援や困窮者への援助に充当されています。
例年ですと、6月中は来日され日本各地を回り皆様からのお布施をいただいておりましたが、本年はそれがかなわない上に、このコロナ禍により佐々井上人の通常経費（スタッフ人件費、寺院管理費、交通費など）も圧迫する状況となっています。インドではコロナ感染拡大に追い打ちをかけるように、暴風雨やバッタの異常発生など自然災害も頻発し、社会不安が増しています。
日本も大変な状況ですが、是非インドへの皆様からのご支援を引き続きよろしくお願い申し上げます。

【ブッダガヤ大菩提寺裁判費用支援者】
長野県　嶋﨑実　10000円
東京都　宮崎智和　10000円
北海道　石川眞知子　5000円

※現在、新型コロナウィルスの影響により、最高裁判所の継続審議中の裁判は中断が続いています。ブッダガヤの裁判も昨年10月の公判延期以降は目立った動きがない状態です。早く事態が収束し、審理が再開されることを期待します。

南天会 YouTube チャンネル開設
Nantenkai Shurei Sasai ORG
インドラ寺の炊き出しの様子や、パウニ大仏倒壊の状況、佐々井上人のメッセージなどアップロードしています。チャンネル登録よろしくお願いします。

◆南天会現況（令和２年７月１日現在）

正式会員数　２０７名

龍族発送者　３５２名

※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆賛同人（５０音順）

漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）
奥平心月（釣月庵庵主）
織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）
小野重徳（仏国土の会会長）
黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）
小池一郎（株式会社マクシス・シントー常務取締役）
島影　透（株式会社サンガ社長）
高山龍智（佐々井上人お弟子）
土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）
冨士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）
宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職）
宮本光研（真言宗御室派元執行）
宮本龍勝（佐々井上人お弟子）
山本宗補（フォトジャーナリスト）

※賛同人について
当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について
南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいたしませんので、どなたでも気軽にご参加ください。

南天会会費・支援金はこちらまで

【金融機関】ゆうちょ銀行
【加入者名】南天会
【口座番号】０１３８０－０－９０１６４
「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。
※他金融機関からの振込用口座番号
　店名（イチサンキュウ）一三九店（１３９）
　当座　００９０１６４

会員種類と年会費

支援会員　１０，０００円（会費＋支援金）／年
一般会員　　５，０００円／年
学生会員　　２，０００円／年（※大学生まで）
※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。
一般会員令和２年入金済→　一般Ｒ２

（南天会事務局）
〒710－0004
岡山県倉敷市西坂 1582－1
一心念誦堂内
TEL　086－463－9391
佐伯隆快(090－5304－8955)
小林三旅(090－4538－2677)
南天会ホームページ　www.nantenkai.org
メール　nantenkai@gmail.com
南天会フェイスブック、ツイッター
ご利用ください

佐々井上人来日中止をうけてのご支援のお願い

インドは現在アメリカ、ブラジルに次いで感染者が増加し、予断を許さない状況が続いています。佐々井上人の来日については今後の推移を見極めたうえで、改めて計画を立て直したいと思います。例年の来日による支援金を補うためにも、この間ぜひインドへのご援助よろしくお願い申し上げます。

龍尾言

「佐々井上人とオンライン交流会」という企画をやってみた。やはり顔が見えるのは良いことだ。不思議なもので、お互いの顔が映ると、恥ずかしさもあってか笑顔になる。40人の人が次々とバンテージーに挨拶し、「元気でやってますか？調子はどうですか？」と笑顔で会話した。そんな皆さんのやり取りを見ている自分も、なぜかうれしい。佐々井上人の古い写真や映像を見ると、群衆の中でいつもニコニコと笑っている姿である。大菩提寺奪還闘争の最中でも、厳しい顔もあるが、笑顔が多い気がする。和顔施という言葉もあるが、自分が楽しくて笑っているという本当の笑顔だ。菩薩道を歩むのは大変だがうれしいことなのだろう。　（佐伯隆快）